

「今年」とはいつのことか

本多啓

On the Reference of *Kotosi*

1. 問題のありか

1.1. その 1

まず、次のクイズの答を考えてみたいと思います。

(1) おととい 20 歳だった人で、来年 23 歳になる人の誕生日は？

これは 1993 年 3 月 26 日の『毎日新聞』番組欄、TBS19 時 30 分「金曜テレビの星! IQ 天才塾」の予告に出ていた問題です。ただし筆者は番組自体は見えていないので、発表された正解は確認していません。

出題者の狙いは、「そんなことがありえるのか?」と思わせることにあったと思われます。そしてその狙いはおそらく成功したでしょう。おとといが 20 歳だからこれから誕生日がくるとしても今年で 21 歳、来年一つ足しても 22 歳にしかない、と推論できるわけですから。でもこれでは正解は出ません。しかし一呼吸おいて頭を切り替えて考えれば、やがて正解が分かります。12 月 31 日です。

それにしても、このクイズをみた人はなぜ「そんなことがありえるのか?」と思ってしまうのでしょうか。さっきの推論はどこがおかしいのでしょうか。そして正解にたどり着く前に「一呼吸おいて頭を切り替える」という手順を踏むとき、私たちは何をしているのでしょうか。

1.2. その 2

小学生の子どもが近くにいる人であれば、正月に一度は次のような会話を耳にすることと思います。

(2) 太郎: 次郎、今年の紅白、どっちが勝った?

次郎: そんなのも知らないの、白に決まってるじゃないか。

太郎: ばあか、今年の紅白はまだだよ。

次郎: うう、ずるい。

紅白歌合戦でどちらが勝ったかをまじめに話題にするあたりがいかに子どもらしくてかわいい¹⁾のですが、それはともかく、一体なぜ次郎はひっかかってしまったのでしょうか。

1.3. その3

人は誰でも一年に数回風邪を引くといいます。筆者は毎年12月になると高熱を出します。12月上旬に熱を出し、下旬になってやっと回復した筆者が数日後、年始の宴会に集まった親類に次のように言ったら、どのように受け取られるでしょうか。

(3) 今年の風邪はしつこいよ。

経験に基づく正当な発言と受け取ってもらえるのでしょうか。それとも、口にこそ出さないものの「今年は今日始まったばかりなのに、しつこいも何もないではないか」と思われているのでしょうか。

1.4. その4

しつこいようですが、もう一つだけ。これも年始の宴会での会話です。

(4) 私: あけましておめでとうございます。あれ、丸々ちゃんは?

親類: うん、**去年**は年末に帰ってきたんだけど、**今年**はアルバイトが忙しいから帰れないんだって。

私: ふうん。昨日まで**去年**だったから、じゃあ一昨日くらいまで帰ってきていて、昨日くらいにまた下宿に戻っていったんだ。

親類: そういうことになるね。相変わらず頭がいいね。君みたいな頭のいい人と喋ってると、とっても疲れるよ。

誤解のないように書き添えておくと、まず第一にこの会話は架空のものです。第二に、筆者はこの親類の発言に出てくる「今年」「去年」の使い方が誤っていると言いたいわけではありません。言語学という学問は、どのような言い方が正しく、どのような言い方は誤りであるかということを決めるものではありません。筆者のような認知言語学者がやろうとしていることは、現実に使われている言葉をありのままに記述し、その使われ方の背後にある人間の認識のメカニズムを考える、ということなのです。ここでは、「私」と「親類」の話がかみ合わなくなってしまった理由を考えることに主眼があります。

そういえば、次のような言い方もあります。

(5) 今年の年末年始は例年になく忙しくなりそうだ。

「年末」は一年の終わり、「年始」は一年の初めのことです。そして、たとえば1998年の終わりと1999年の初めは連続していません。しかし「今年の年末年始」は連続した一つの期間です。なぜこのような食い違いが生じてしまうのでしょうか。

以上の問題は、どれも「「今年」とはいつのことか」という問いに関わるものです。この一見あまりにも簡単そうに見える問いには、実は意外と厄介な問題が含まれているのではないかと、それがこの小論の背後にある問題意識です。

2. 二つの「今年」

それでは「今年」とはいつのことなのでしょう。「今年」とは「現在時を含む一年」のことです。そして一年は1月1日に始まって12月31日に終わります。つまり

(6) 「今年」(「今年1」)とは現在時を含む1月1日から12月31日までのことである。

となります。そして「去年」と「来年」はそれぞれ「今年の直前の一年」、「今年の直後の一年」となります。

これをもとに先に述べた4つの問題を考え直してみましょう。「その1」の正解は12月31日でした。これが正しいということは、次のように確認することができます。

(7)

おととい	去年の12月30日	20歳
(きのう	去年の12月31日(誕生日)	21歳)
今日	今年の1月1日	21歳
(今年の誕生日	今年の12月31日	22歳)
来年の誕生日	来年の12月31日	23歳

しかしこれが正しいとすると、今度は別の問題が出てきます。そもそも、「そんなことはありえない」という最初の推論はどのようにして出てきたのでしょうか。さっきの推論を見直すと、次のような前提が隠れていたことが分かります。

(8) 「おととい」は「今年」に含まれる。

これが(7)と矛盾するわけです。しかしこの(8)はこれだけ取り出してみると、一見きわめて自然に見えます。きわめて自然だからこそ、無意識のうちに適用してしまったのです。それではこの(8)に現れる「今年」とは一体いつのことなのでしょう。これは、次のように考えることができます。

(9) 「今年」(「今年2」)とは現在時を中心とする(前後(最大)6か月の)期間のことである。

以下、(6)によって規定される「今年」と(9)によって規定される「今年」をそれぞれ「今年1」、「今年2」と呼ぶことにします。この2つの「今年」は相異なる原理によって規定されています。そして一見すると両者は大きくずれるように見えますが、通常はずれが生じることはほとんどありません。というのは、私たちが「今年2」を考えるとときに念頭におく「前後」の期間は実際にはそれほど長いものではないのです。通常は長くてもせいぜい1～2箇月です。したがって「今年2」は「今年1」の中に丸ごと含まれてしまうのです。しかし、「現在」が「今年1」の始まりや終わりに近い時点である場合には、「今年2」は「今年1」の枠をはみ出すことになります。

そして私たちが日常の生活で「今年」という場合には、特に意識しない限り「今年2」の意味で用いることが多いようなのです。

あらためて前節の問題に戻しましょう。「その1」において私たちが「そんなことはありえない」と推論してしまうのは、暗黙のうちに「今年2」を念頭においてしまう

からです。つまり「おととい」を解釈するときに、「今年2」に基づく(8)を適用してしまうのです。そして私たちが「一呼吸おいて頭を切り替える」ときにやっていることは、年の変わり目がからんでいるだろうという見通しを立てて前提としての(8)を捨てること、すなわち「今年」のモデルを「今年2」から「今年1」に切り替えることなのです。「その2」～「その4」も同じく、「今年1」と「今年2」のずれが問題となっているのです。

3. 「今日」とはいつのことか

「今年」と並行するわけではないのですが、「今日」という概念にも似たような問題があります。「今日」とはいつのことでしょうか。基本的には、「現在時を含む一日」です。それでは、「一日」とはいつ始まっていつ終わるのでしょうか。一つの規定は、次のようなものです。

(10) 一日とは、0時0分から23時59分までの期間である。

しかし、私たちにとっての「一日」は実はこれだけではありません。次のような表現が自然に響くのがどういうときか、考えてみましょう。

(11) a. 「さあ、今日も一日がんばろう」

b. 「今日も長い／短い一日だったなあ」

すると、次のような規定に思い当たります。

(12) a. 起床してから就寝するまで。

b. 家を出てから帰宅するまで。

c. 職場／学校に着いてから職場／学校を出るまで。

d. 職場／学校で仕事／勉強を始めてから仕事／勉強を終えるまで。

このように様々な「一日」概念があり、それにあわせて様々な「今日」があります。(10)によって規定される「一日」は、人間の行為とは独立に生じる時の経過に基づいているため、すべての人に同じように適用することができます。その意味でこれは公共性の高い一日概念であるといえます。それに対して(12)の「一日」は個人の行為、ないしは生活の仕方に依存して決まります。その意味で公共性は低いものです。しかしその代わり、個人の行為に根ざした規定である分、各個人にとっては馴染み深いものでもあります。

ただし、通常の健康的な生活を送っている人にとっては(12)によって規定される「一日」は(10)の「一日」に含まれてしまいます。したがって両者の間のずれはほとんど問題になりません。しかし筆者のようにあまり健康的でない生活を送っている人間の場合、(12)の「一日」と(10)の「一日」は大きくずれてしまいます。

特に問題が大きいのが(12a)の「起きてから寝るまで」です。これが、時として厄介な問題を引き起こすことがあるのです。それは、深夜0時以降に放送されるニュースの場合です。

放送局は公共性を重んじますから、「今日」概念としては(10)に基づく次の「今日 a」を採用します。

(13) 「今日 a」とは、現在時を含む、0 時 0 分から 23 時 59 分までの期間である。

一方筆者のような人間の「今日」概念(「今日 b」)は(12a)に基づいていて、次のようになっています。

(14) 「今日 b」とは、現在時を含む、起床してから就寝するまでの期間である。

これらにあわせて「昨日 a」「昨日 b」も規定することができます。

(15) a. 「昨日 a」とは、「今日 a」の直前の 0 時 0 分から 23 時 59 分までの期間である。

b. 「昨日 b」とは、「今日 b」の始まる前に目が覚めていた最後の期間であり、通常は現在時からみて 24 時間前を含む。

ここで例として 6 月 2 日午後 11 時 30 分に起こった地震に一時間後(6 月 3 日午前 0 時 30 分)のニュースで触れる場合を考えます。この地震に関して「今日」「昨日」「今夜」「昨夜」などの語彙を用いて報道するとすると、放送局は a 系列の表現の仕方を採用しますから、一時間前の地震は「昨夜 a の地震」「昨日 a の地震」などと表現されることになります。一方、これを聞く私たちは b 系列の言葉の使い方になじんでいます。したがって「昨夜の地震」「昨日の地震」は「昨夜 b の地震」「昨日 b の地震」と解釈されがちです。ところで、b 系列の言葉の使い方では午前 0 時 30 分からみた一時間前という時点は「今日 b」に含まれます。したがって「昨夜 b の地震」「昨日 b の地震」を一時間前に起こった地震を指す表現と解釈することはできません。「現在時から見て 24 時間程度前に起こった地震」と解釈されてしまいます。

ということで、放送局が「現在時からみて一時間前に起こった地震」というつもりで使った「昨夜の地震」「昨日の地震」が、「現在時から見て 24 時間程度前に起こった地震」という意味に解釈される(誤解される)可能性が出てくるわけです。これは結構大きな問題ではないでしょうか。

実は、放送局の中にはこの問題をすでに数年前から意識しているところがあります。そのような局では「昨夜の地震」、「昨日の地震」のような表現を避けて、「6 月 1 日(未明)の地震」「木曜日の(未明の)地震」などのような表現を採用しています。しかし今でも「昨夜の地震」のような表現を使いつづけている局もあるかもしれません。あるとしたらそれは担当者がこの問題に気がついていないか、あるいは気がついてはいるけれどもそれを「視聴者側の不注意の問題」と考えているかのどちらかでしょう。

なお余談になりますが、現在の大学生の言葉ではその日に始めて会った人に対して午前、午後の区別なく「おはよう」ということが定着しています。これはかつてはマスコミ、芸能界、コンピューター業界の言葉づかいといわれていたように記憶しています。大学生に広まったのはコンビニエンスストアでのアルバイトの影響でしょうか。いずれにしてもこの背後には、「一日」概念としての(12c)ないしは(12d)の影響があると考えられます。

4. 「規則正しい生活」とは

毎朝 11 時に起床して、すぐに朝食をとる。正午に家を出て 2 時間かけて勤務先に着き、午後 2 時から仕事開始。3 時になったら自分のデスクで仕事をしながら昼食を取り、そのあと 8 時まで働く。8 時になったら立ち食いそばを食べ、その後 2 時間かけて帰宅する。午後 10 時過ぎに帰宅した後、入浴したりテレビの深夜番組を見たりで、結局寝るのは午前 3 時。

これを毎日きっちりと繰り返したとします。このような生活を「規則正しい生活」と呼ぶことはできるでしょうか。以前授業中に聞いてみたところ、受講生諸君は一様にあきれたような顔をしていました。ということは、「規則正しい生活」とは、同じような生活行動を（ある意味で）「規則正しく」繰り返すことではないようです。

「規則正しい生活」とは、(12) で規定された一日が次の (16) によって規定される一日と（ほぼ）一致するという状態が続く、ということであると考えられます。

- (16) a. 社会の中の「普通」と見なされる人々が起床すると思われる時間帯から就寝すると思われる時間帯まで。
- b. 社会の中の「普通」と見なされる人々が家を出るとと思われる時間帯から帰宅すると思われる時間帯まで。
- c. 社会の中の「普通」と見なされる人々が職場／学校に着くと思われる時間帯から職場／学校を出るとと思われる時間帯まで。
- d. 社会の中の「普通」と見なされる人々が職場／学校で仕事／勉強を始めるとと思われる時間帯から仕事／勉強を終えると思われる時間帯まで。

(16) は行為に基づいた一日概念であり、その点で (12) と似ています。しかし (12) が一人一人の個人の行為に基づいた一日概念であるのに対して (16) は社会的な慣習に基づいています。そのため (16) は (12) とは異なり、比較的公共性の高いものです。

また、(16) は公共性が高いという点で、(10) に似ています。しかし (16) は人間の行為に基づいており、その点で人間の行為とは独立に経過する時間に基づいている (10) とは異なります。

5. もう一つの「今年」

最後にもう一度「今年」の話に戻って、この小論を締めくくりにしましょう。第 3 節の冒頭で、第 1 節の「今年」の問題と第 3 節の「今日」の問題は並行しないと述べました。「今年 2」が＜現在を中心とすることによって規定される期間＞である一方で「今日 b」は＜個人の行為の連鎖が作り上げる単位としての一日に基づいて規定される期間＞ということで、両者は異なる次元に属するものなのです。それでは、＜個人の行為の連鎖が作り上げる単位としての一年に基づいて規定される期間＞としての「今年」は存在するのでしょうか。おそらく、存在しないと思われます。

一方、「規則正しい生活」という表現の背後にあると考えられる (16) の＜一日＞に対応する＜一年＞は存在します。つまり、＜社会的な慣習として成立した行為の連鎖が作り上げる単位に対応する期間としての一日＞に対応する、＜社会的な慣習として

成立した行為の連鎖が作り上げる単位に対応する期間としての一年＞です。それは通常「年度」と呼ばれる期間です。

「年度」は4月1日に始まって3月31日に終わる期間です。この期間を大学教員の立場から見ると、4月に入学式を行い、まもなく授業を行う期間に入り、夏になれば試験を実施し、その後学校に行かなくなり、秋になると再び学校に行きはじめ、やがて学校に行かない時期としての冬休みを迎え、1月には再び試験を実施し、2月には入試を実施し、3月の終わりに卒業式を行う、という一連の行為に対応する期間ということになります。この行為の連鎖は毎年繰り返されます。「年度」とはこのような社会的に慣習化された行為の連鎖が作り上げる単位に対応しているのです。

そして、現在時を含む年度は厳密には「今年度」と呼ばれるべきものですが、これが「今年」と呼ばれることがあります。このような＜今年＞を「今年3」と呼ぶことにしましょう。当然のことながら、「今年3」に対応して「去年3」「来年3」も存在します。そして「今年1」と「今年3」は重なる部分もありますが、途方もなくずれる部分もあります。たとえば今日が2月25日であるとする、「今年1」のうち1月1日から3月31日までは「今年3」に含まれますが、4月1日から12月31日までは「来年3」になってしまいます。このような場合、学校関係者の間では「今年」「来年」という語を「今年1」「来年1」としてではなく、「今年3」「来年3」として使うことが一般的です²⁾。

謝辞および註

この小論は1996年度「教養演習II」および1997年度「言語文化論入門」(いずれも本学における授業)の内容の一部に補足を加えたものです。受講してくれた学生諸君に感謝します。

- 1) 「どっちが勝った?」という質問文は「どちらか一方が勝った」という命題を前提に持つのですが、ここではその問題については考えないことにします。
- 2) 中には規範意識の強い学生さんもいて、「先生」と言ったあと一瞬迷ってから「今年は何コマ担当されるのですか」と聞かれたことがあります。1998年の1月のある日のことでした。彼女は「今年」を「今年1」として使ったわけです。